

！に誌本ばせ欲とんら知を想思一統義主蓮日

大正四十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正四年十一月十五日發行(毎月一回十五日發行)

# 統一

◀號月一十▶

▲號九十四百二第▶

團一統 地番四十町島清北區草淺市京東 所行發

行發刷印日五十月一十年四正大

雄日木鈴人刷印 郎四英尾松地番四十町島清北區草淺市京東人輯編兼行發

◁事の金前は者讀購新○錢八金共稅郵部一▷

四五頁半圓八同常通○圓九頁半圓五十頁一別特料告廣

(團一統) 番九一一一京東座口は込拂金代

十一月號 (第二百四十九號) 要目

△虔文奉祝即位御大禮	同人
△高御座の義と法華經眼	一記者
△佛教信仰の體系	主幹 本多日生
△總在一念抄講義	本多日生
△御大禮と精神的記念	長谷川六合
△雜誌「統一」の刷新に就て	山根青村
△統一音信	各地教信
△課題和歌募集 (十九頁参照)	俳句等
▲本誌代値上廣告	宮内省御歌所貴族院議員 子爵 清岡長言君選
了承不相變御愛讀を乞ふ	本誌は本號より一部に付一錢五厘値上し代一ヶ月八錢と致候間此段御

△編輯謝辭

本月は前編輯者よりの引継ぎ、其他印刷上の手おくれの爲に紙數減少、并に不體裁の段は幾重にも御ことはりを申してをさす。

虔奉祝即位御大禮

統一團同人

- |             |            |           |             |
|-------------|------------|-----------|-------------|
| 一 天地のむた窮みなさ | 天津日嗣の御位に   | 我大君ののぼります | 今日の御典の尊とさよ  |
| 二 垂穂の稻の大御饌に | 白酒黒酒を取りそへて | 皇御神にさゝげます | 大御祭のかしこさよ   |
| 三 大き正しき君か代の | 大御祝に外國の    | つかはし人も列りて | 共にことほぐめてたさよ |



# 高御座の義と法華經眼

『たかみくら』とは絶對尊貴の位階の義である。天祖以來一貫したる祖高、祖中の御位に上りまして、常に大和民族の中心點として尊威を耀し給ふのみならず、宏く萬邦に仁慈の王威を垂れ給ふ意義に於て高臺に上り給ふのである、

『たかみくら』は豎に萬世一系の高所中心を示し給ふと共に、横に萬邦一統の最高所を仰がしむべき場所である。

『たかみくら』は天皇の威嚴に於て峻絶して居る、且つ世界萬物の統一所として萬機の會所として、而して萬機の産所である。

神武天皇より數へまつりて茲に第二百二十二代、而も其代數たるや人々序列の分數に過ぎずして、而も實には一貫したる御一代である、億々萬々歳を一貫して天皇御一代、聖天子御一代である。即ち『たかみくら』は幾千八千代の聖天子の立せ給ふ常世に永に、あまつ神代の大古より幾萬億歳の末代に至るまで天下しろしめす皇大君のやすらはせ給ふ尊貴の御臺である。

『たかみくら』は天地のむた窮みなき、天つ日嗣の慈光耀き、和光照し、稜威透り、明德あけき無上臺、恩威雙び出づる源臺にして、いかに尊き、うづに、うま

しの天所である。

天照します大神より禪り給ひ、受け給ひて、其間寸隙を生ぜず、連々綿々、傳承の神器と共に神統の正公を示し給ふもの即ち『たかみくら』ではないか。

萬邦の帝位王位の繼承の義いやさわに多けれども建國の最高理想『たかみくら』に示して、仁慈の大御心に世界人心の統一義を圖し給ふもの、如何なる國にかあるべきや。日出の國、さきにほふ國の將來や正に定めり、かん定めに定まれる雄武の國大日本のいや榮えんことやたのしき。

之れを謹んで法華經眼に映し奉りなば『我實成佛』の顯本は本佛久成の大説法にして、佛陀最高所の指示である、權迹諸佛の小位小階を破却開顯して本妙最尊の高臺を示し給ふのであつて、即ち我『たかみくら』の意義と何の異るところはないのである。

萬邦帝王の實冠は權迹外道の末師も亦之れを奉持するに契ふであらう、されど最尊無上の『たかみくら』の御意義を會通し奉る教や、實に最尊法華經の御義に於てよく是れを致し能ふのである。

鳥は鳥の聲に集る、鶯の聲は鶯に依つて解されねばならぬ、最尊無上唯一の經典此にあり、等劣の凡教奚ぞ大日本國の『たかみくら』の高義を解し得やうか。



日のみ神は沖々として下界を照し、八葉の淨蓮は薰香を發す、其處に大日本國  
『たかみくら』の大義顯れ、其處に妙法華の法照應す、嗚呼美なる哉法國冥合  
所の莊觀大觀、げに絶麗ではないか、げに絶妙ではないか。

國に大日本國あつて始めて眞國ありと云へやう、法に法華經ありて始めて眞法  
ありと云へやう。

本年今月 聖天子『たかみくら』に立たせ給ふ、人類億兆狂喜して泣く、國の  
聲を以てして萬歳と祝ひ阿那尊と叫ぶ、法の聲を以てして南無妙法と祝ひ南無妙  
法蓮華經と唱ふ、極所の融合統一の妙境、誰れか是れに疑點を挾むものであるか。

聖天子は國に親として人の子を見給ふに悉く是れ仁子である、是れ聖釋尊が『悉  
是吾子』の悲撫を有せ給ふと契一である。而して國法二者を不二觀せし蓮祖が『一  
切衆生の爲に涙瀧の如し』と述ぶるもの此に二者冥合の切なるものを示されたの  
であると思ふ。

然らば法華經眼を通じて我『たかみくら』を觀じ奉れば、天上天下一尊一王の聖  
天子、仁慈愛撫佛陀契一の聖天子の位につき給ふ『たかみくら』であつて、此に億兆  
民衆は主師親三徳の尊位耀き給ふ天皇陛下にましますを知覺し恐懼するのである  
今我等何の幸福であるか國を日本に享け、生を此に養ふ而して今此の盛典に遭  
ひまつりて、育龜の浮木に遭ふの欣びも尙譬へてないことを記すの光榮に浴する  
のである。

# 統



十一月號

(第二百四十九號)

## 佛教信仰の體系

(大正四年十月二十三日統一閣に於て)

本多日生講話

### 一 總論

今日は日蓮大聖人の透明なる知見と熱烈なる信念より出て  
て紛糾錯亂せる佛教徒の信仰に對して條然たる統歸を教へ給  
ひし統一主義の眞意を先揚せんが爲めに佛教信仰の全體に亘  
つて、その系統を論明して統一主義讃仰者の參考に資せんと  
思ふ、こゝに體系と題せしは佛教の信仰を一個の人間の身體  
の如くに見て、何處が頭であり、何處が胴であり、何處が手  
てあり足であるかと云ふ風に統括して見たいのである、一切經  
に亘つての信仰、又佛教の歴史に現はれて居る處の幾多の信  
仰に就て之を完備したる一箇の宗教統轄ある信仰として論ず

佛教信仰の體系

るのが目的であつて體系と云ふ字を使つたのであります。即  
ち佛教信仰の全體の系統と云ふやうな意味でございます  
が、此は無論大きな問題であり、十分に其の意味を盡すこと  
は困難であり僅少の時間を以て是を解決することは、殆んど  
不可能のことでありますけれども、自分が研讀致しました  
結果に基づき、簡短な時間に於て説き得られるだけ講演を致す  
考へてあります。

佛教の信仰が多くの人の考へる如くに分裂して居つて、サ  
ウして其の何れもが大事なものであると云ふ考へを許すなら  
ば、佛教は支離滅裂なる宗教であつて、サウして殊に宗教の  
職分の最も大切なる點を失ふてあらう。宗教の職分としては

國民精神の根柢を築き上げ且又國民思想の聯絡統一を築き上げる働きが最も大切である。社會に對しても矢張り社會のあらゆる出来事を調和して、種々衝突の形に現はれる事を緩和する爲に、其處に調節的作用を起すのが非常に大切なのである、されば宗教の信仰そのものが大事なるは云ふまでもないが、只だ其の一部に偏傾して局量なる信仰と信仰とが相讎り反目疾視して彼此互に相呪ふが如き感情を高むるは甚だ厭ふべきことであり、且又卑むべきことである。併ながら極めて圓滿な充實したる信仰を鼓吹するものと、偏傾したる局部に固着せる淺薄な信仰に在るものとの間に反目の觀を呈するは決して否認すべき理由はない、局部に促へられたる思想を矯正して圓滿なる信仰に導き或は淺薄なる信仰を撤廢して深遠なる信仰に至らしめると云ふ事は、其處に衝突が現はれても此は止むを得ぬことである、局部に囚はれて其處に異なれる信仰を立て、相闘ふと云ふことであれば、是れは誤つた事である、宗教そのものとしても勢力を占むる所以でない、サウして宗教の職分を盡す上に於て國民精神を統一する事、社會の矛盾を調節する事、サウ云ふ様な大切な任務を打忘れず仕舞ふ様になる。唯々信仰さへあれば何んでも宜いと云ふ様な意味ばかりを擴張して、サウして狭きより狭きに這入ると云ふ様な觀念は、ドウも是れは是認し得られないのである。

ば、到底その職分を全ふすることは出来ない。故に佛教の復活と云ふことも、統歸を得たる信仰を發揮せなければならぬ日蓮主義は從來の主張の爲に、他の者を壓服し來たと云ふにあらざりして、靜かに聖人の教訓を拜するならば、實に公明正大に佛教の統歸と云ふことを教へられて居ることが明かになるのであります。

そこで又他の宗教と對抗する場合に於ても、佛教の信仰は如何なるものであるか、旗色鮮明に表示することが出来ないならば、無論他の宗教と對抗して勝利を得ることは出来ないのであります。戰爭に譬ふれば自分の味方の軍隊は、其の戴く處が支離滅裂であり、力が分裂して仕舞つて居ると云ふこととてあれば到底優勢なる敵に對して勝を制することは出来な、軍隊の最も大事な點は即ち全軍勢力の一致の行動である、佛教勢力の一致と云ふことは即ち信仰の體系を統一的に解決せざれば得られないのであります。さうして此の理想的なる要求が果して佛教經典の全體および歴史に渡つて解釋し得らるるか、其の希望を充す意義を説明し得るかと云ふ場合に、私は明白に此の理想的希望を満足せしむることが出来るとの確信を有するものである。其の證據は何であるかと云へば、一切經すべては其の證據である佛教史の全體は其の證據であり、日蓮聖人の著書全部が其の證據である。すべて此の理想

ります。日蓮主義は其の深きに入るに従つて排斥思想に富んで居ると批難されて居る日蓮主義が一番多くサウ云ふ局量せる性質を持つて居ると考へられて居るが、是れが非常な間違ひである。聖人の信仰は純一なるものには違ひないが、其の純一は即ち總ての佛教の歴史および經典に現はれたる信仰を總括したる上の純一である、即ち統一的信仰である。他の信仰と相並んで而して相互に狭きより狭きに入つて相闘ふと云ふ様な意味でなくして、此の佛教の體系的に現はれたる信仰を總括して、而してそれが彼の曖昧な抱容主義でなく、どれも是れも容れて置けば宜いと云ふ様な混同的のものでなくして、其の全體が一個の信念の中に美事に統一せられ、統歸を得て居るものである。此は日蓮主義を學ぶ者の注意すべき尤も大切な點である。

又眼を轉ずれば、佛教が將來に於て復活するか否かと云ふ大問題がこの體系的信仰の統一に懸つて居ると思ふ、此の佛教全體に亘れる信仰を、今云ふ如く統歸を得せしめて、サウして進むのでなかつたならば、日本の國力が世界的に發展して行く場合に、佛教が之を翼賛するにしても又東代の文明が接觸して行く場合に、佛教の職分を全ふせんとしても其大任務を果さんとする場合に於ては、己れの奉ずる所の信仰、己れの擴むる處の信仰が統歸を得て強力なるものでなければならぬ。又眼を轉ずれば、佛教が將來に於て復活するか否かと云ふ大問題がこの體系的信仰の統一に懸つて居ると思ふ、此の佛教全體に亘れる信仰を、今云ふ如く統歸を得せしめて、サウして進むのでなかつたならば、日本の國力が世界的に發展して行く場合に、佛教が之を翼賛するにしても又東代の文明が接觸して行く場合に、佛教の職分を全ふせんとしても其大任務を果さんとする場合に於ては、己れの奉ずる所の信仰、己れの擴むる處の信仰が統歸を得て強力なるものでなければならぬ。

## 二 佛教信仰の源流

其處で第二に話したいのは佛教信仰の源流、此の膨大ななる佛教が、種々なる宗派に分れ、同一宗派中に於ても各々異なる信仰を抱き、嚴密に云ふたならば、殆んど各人個々に異つた信仰の下に立つて居る。それを幾箇に分かれて居るか云へば、殆んど其の數が擧げられない程に區分されるけれども、唯だ一箇の根源から流れ出てたるものに相違ない。それは釋迦牟尼佛が始終お説きになつて居る雪山の頂に阿耨池と云ふ池があり、それが東西南北に流れて、四大河になる。其の四大河に又支流があつて、千百の河に分かれるが、併し最後は一の大海に歸着して一の海水となるが如きものである。釋尊の教へは法の方から云へば即ち一の法より生じて無量義に分派して、最後は一乘の教に歸着する。之を信仰の側から

云へば一個の佛陀の悟り、其の佛陀の悟りを渴仰する精神より流れ出て、そうして様々なる信仰の形式を生じ、最後また一箇の大なる意義ある信仰の中に統一せらるるのであり、斯う云ふ意味は決して動かないことであると思ひます。然らば其の源流如何と云へば、唯今申ました釋迦牟尼佛が、御歳三十五歳、印度の迦耶城菩提樹の下に座して、正覺を遂げられた其の御心の悟り、其の御心の悟りより總べて流れ出てたるものである。其の御心の悟りの状態はどうかと云へば、是れは一切經に説き擧げられた方から眺めて云へば、廣いものであり、深いものである。是れは佛教教典の全部に現はれ、又滅後に發展したる種々な教義解釋にある通り釋迦牟尼佛一人の御悟りより流れ出て、深遠なる哲理となり或は方便となり、又周到なる道德の教訓となり、又純乎たる信仰の感化となり、又釋牟尼世尊の行爲となつて事實的に感化を發されたそれを通ふして其處に又幾多の高僧碩徳が現はれて其の思想が活動するがこれ等は皆な釋尊の御悟が源となつて、遂には傳教大師の思想となり弘法大師の思想となり日蓮聖人の思想となり、様々に働くのであるけれども何れも皆な釋尊の御悟りを源としての流れてある。佛陀のお悟を一言に云ふことは六づかしいが、ざつと考へれば

### 何とも云へない清い喜び

と云ふて宜しい。法樂と云ふ言葉で云ひ現はしてあります。我らの物質的の喜びでなく、少しも其處にこだはりの無い精神的の喜びであつて、それが非常に崇高な意味になつて、我々の思量し得る事に例して見れば、宗教の信仰に依つて慰められたる法悦歡喜の精神、それが釋尊の御悟りに幾分か近いやうに思ふ。其の下に在る者は天然の美に接して喜ぶ、即ち月の光に懐かれ花の美に憧がれて、人生の煩累より解脱して何とも云へない面白い嬉しい感じを持つ、それは決して肉體の方のものでなく、精神的に崇高なる法悦の感を抱く。それが非常に磨き上げられ、洗練されて、何とも云へないものになつて、それが殆んど光明と云ふ様なものに現はれて来る。それが身體の後ろに現はれて来るのが御光のさして居る状態になつて、佛陀の御身體の背面より放たれて居る、其の光りが十方世界を照すと云ふ程になる。人生に處していろ／＼此の苦しいとか嫌なとか、悪いとか忌はしいとか云ふ様な此の感情から逃れて、何事も動かすことの出来ない法樂となり禪悦となり、サウして丁度天に逍遙して紫の雲を踏んで行くやうな心地でそれを一段下げて来ると

### 法樂

智慧の光(眞理に對して)  
慈悲の光(衆生に對して)  
此處に眞理に對する智慧の光が現はれ。又一方には迷へる者に對しては慈悲の光となつて来る。智慧の光りと慈悲の光りが法樂の大光明から二分されて現はれて来るのである。故に「壽量品」には、

### 慧光照無量

「慧光照すること無量にして」と説かれて、世尊の智慧が光に譬へられ、又慈悲の方に就いては「慈眼視衆生」と云ふ言葉となり、慈悲の眼を以て衆生を視ること、其處には福壽の海は無量なりと説かれてある。サウ云ふ様な言葉は皆な法樂の中から出て来るので、衆生を視られる慈悲が廣大な光りを放つと説かれ、涅槃經には「月愛光」とある月は誠に優しくして、母の徳のやうに現はれて居る。月の温籍にして玉の様な状態は、佛の慈悲に似て居る。月の光りを視て「かこち顔なる我が涙かな」と詠んだ人もあるが、それは神經が衰弱して居るとか、世の中を悲觀して居る場合のことである。先づ人間の通常の意識から云へば、月を視れば歎びに堪へぬ、それを佛の慈悲に譬へて「月愛光」と稱したのであります。慈悲を擴げれば智慧は其の中に還入り智慧を擴げれば其の中には

慈悲を攝する智慧と慈悲とに分かつことの出来ないものでありこの智慧と慈悲を合せて其處に法樂あり、是れが悟りである處が智慧の光りが流れては宇宙の實相を説明し、種々様々なる深き佛教の哲理が現はれて來、又道德の教訓も現はれて來る、慈悲の光りが流れては一切衆生を救ふべき力となり、又それからして行爲の上に現はれて衆生濟度となる。慈悲に信頼する方は信仰より進み智慧に道を借りて行く方は觀念行に進む。この觀念行も佛の悟を渴仰して進むのであるから、廣い意味に於て云へば矢張佛教の信仰である。

此佛の御悟の源より發して其處に一切經が流れ出て、釋尊の悟りよりして眞理を説明し、或は衆生濟度の慈悲の流れが一切經となり又それに感化せられたものがあつて其處に僧伽を生ずる、僧伽の下には比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆が出来たのである。其處で佛教信仰の正路は三寶に歸依するに在りとの教が生じたのである。

- 悟——佛寶
- 教——法寶
- 弟子——僧寶

佛の悟りがあり而して其の悟の流れが教を生じ、其の教の感化の下に僧伽が出来たのである。之を佛法僧の三寶と云ふ此處で云ふ悟は無論釋尊の悟である。法寶とは釋尊の教であ

る。苟くも佛教を修行せんとすれば、皆釋尊の教を慕はなければならん、佛陀は即ち覺者であり悟れる人である、或人が我身即佛と云ふのは、是れは理論である。佛陀は覺者である我々は佛性を持つて居つても不覺者であり、覺らざる人である。法と云ふことも種々に分かれる、直接に宇宙の眞理を指すのと之を説かれし教を指すとの別がある即ち理法と教法との區別を生ずる今云ふ法實とは何であるか、釋尊の教を指すのである。勿論其の教法の内容は何かと云へば眞理と離れたるものでない。理と教と全く合一して居る。理と教と合一するか合一にならないかと云ふことは、佛の御悟りを通ふして結びつける關係に於て合一されるのである。若し佛の悟りを通ふさずして理が教と一なりとせば其は他の宗教の事となる。此處に他の人があつて、其の人の心を通ふして宇宙の眞理が教となつて出て来るならば、其は他宗教の教として、發生したもので、孔子の教として儒教がある、基督の教として基督教を生ずるのである。佛教と云ふは此の釋尊の教を一點も疑はぬ所に於て存立して居るのである。であるから三寶の中に法實と稱するは即ち教法である。僧伽と云ふのは和合と譯されて居るが、集團と云ふ意味をも含んで居る。正義の思想を中心として集つた團結である。けれども集團の中に統轄する者がなければ直ぐ争ひが起る、例へば甲乙の間に反對の解

釋をして見解を異にして争ふと云ふ場合には、之を裁斷する權能を持つ者が要るから、僧伽の首領を要し之を長老と云つたり或は和尚と云つたり、いろ／＼な言葉で以て現はして居るが、之れは此の和合集團を支配する所の即ち首領である。其の思想は一切經に最初から現はれて居る。最初に阿難が佛滅後に此の集團の争ひを生じたる時には如何すべきかと云ふ間に對して「其の場合には長老を定めてそれが裁決を極めると云ふことになつて居る。又大低の御經には其の經を附屬すると云ふことがある。阿難尊者に附屬するとか、上行菩薩に附屬するとか云ふのは集團の首領を定められたのである、絶対に佛を信じて其處に争ひが起るから、其の裁決權を阿難とか上行とかに與へたのである。それが佛教および歴史に現はれて佛教三寶の信仰となつたのである。唯だ集團に歸依するのみであつて、其の首領がないと云ふならば、佛教の三寶式を破壊することになる。即ち法華宗で云へば久遠實成の釋迦牟尼佛を佛實とし法華經の肝要を結んだ妙法蓮華經が法實であり、法華經の行者は皆な僧伽であるが、釋尊は上行菩薩を別付囑の大導師と定め給ひ、再身日蓮大聖人が集團の首領となられて居る是れはモウ議論すべき餘地はないことである。此の三寶の關係に議論を生じ是れから種々の分派を生じて來るのであります。然しながら如何に分派しても佛教三

寶の源は釋迦牟尼佛より他にはありません。此の釋尊を教主と仰ぎ、釋尊に對して絶対の歸依を捧ぐる者が即ち僧伽であります。處がそれが流れ流れて末になると、釋迦牟尼佛に對する歸依信仰より去つて行つて、釋迦牟尼佛を渴仰せざる者が現はれて來たり、何かすることは、全く逆路の甚しきものであり、佛教界に於ては正しく異端邪説であります。この三寶の中の教法を解釋するに當りて議論を生じ或は小乘があり大乘があると云ふことになつて來るのであります。が、それは何れにしても悉く釋尊の御悟の源より流れ出てたるものに過ぎない。故に佛徒は悉く釋尊の悟りを渴仰すべきものである。佛教信仰の源流は釋尊が菩提樹の下に座し給ひてより出たのであるが之は顯本の説より見ればこの菩提樹下の正覺は久遠よりの悟りをこゝに示視されたのである。而して釋尊の成道は自己一人の解脱の爲めなく衆生を救ふ爲めに八相成道の儀式を現示されたのである。故に佛教信仰の實際の出發點を考ふれば、迦毘羅衛城に生れたる悉達多太子と云ふ方が、金殿玉樓の中に生活をして居られた一個の俊才が、人生觀、宇宙觀に於て大なる刺激を受けて、大奮發をして王城を逃れ出て、サウして修業を積んだ結果、菩提樹の下に於て豁然として絶大なる悟りをお開きに相成り其の光明より發したる教へに感化せられたる僧伽に依つて、様々

なる佛教の解釋や信仰が出來たのである。されば如何に分裂して居つても其の源を求むれば釋尊のお悟りである。若し釋尊のお悟りがなかつたならば佛教の御教へもなし。僧伽もない、されば此の釋尊のお悟りが佛教信仰の源流をなすものであると云ふは事理頗る明白のこととあります。(以下次號)

○謹奉祝大正御即位御大典 袖浦會同人

み寶の船もはらみてこぬらかし まさこ

すめら御大典をほぐさまのして

のり妙の弘まる國に生れ來て 同

今日のみのりにあふぞ嬉しき

五十鈴川流れつさせぬ皇の 稻水

千代の榮を祝ふ今日かな

野邊の虫深山の鳥も囀らむ 愛泉

我大君の御代をたへへて

四方の海浪風たつも君が代の 同

ゆるぎなきこそ嬉しかりけれ

大君の正しき御代は天つ神

皇み國の千代に八千代に 塵外

うまし酒くみて祝はん大君の

高きみくらに登す日なれば 同

# 御大禮と精神的記念

長谷川六合

御大禮は皇室の御慶事である、天皇御一代に一度より無い御盛儀である。皇室は畏れ乍ら六千萬同胞の御宗家總本家である、天皇は我々の君にして即直ちに親である。忠孝一致論の起る所以は爰に存する、此の事は高天原以来の歴史を見れば直ぐに了解する、既に皇室が我々國民の御宗家總本家であらせらるゝ以上は、我々は只だ通り一片の義理的觀念を以て皇室に對し奉るべきものでは無い、實は父子の親を以て對し奉らねばならぬ、隨つて御大禮を皇室の御慶事として祝ひ奉ると云ふ他人根性ではいかぬ、皇室の御慶事は即直ちに我々自家自身の慶事として喜ばねばならぬ、此歡喜の氣分、奉祝の意を表示する爲めには、或は團體として、或は個人として種々の記念事業も起りつゝあるのである。

我輩は此際、記念事業の大に起らん事を希望するのである、文士は筆を清めて大著述をするがよい、工業家は何んなりとも發明工風を施すがよい、商業家は新市場の開拓をするがよい、地方の者は植林に手を着けるがよい、個人として團體としても、成すべき事企すべき事は澤山にあるであらう、併し我輩が六千萬同胞に切望したいと思ふのは、斯る形に現はれたる事柄よりも、無形の自己精神界の内裡に於て、銘々相當の記念する所があつて欲しいのである、

外面に現はれたる事業は、出来る人もあれば出来ない人もある、然るに心の中の精神的記念なら、老も若きも、妻子のあ

る者も、獨身生活をして居る者も、金の有る人も、其日暮しの貧乏人も、誰でも彼でも、心の中に、捨へ次第の物が出来るのである。

然らば精神的記念はどう云ふ風にするか、大禮を一期として猛烈なる忠君愛國の觀念を作れと云ふか、或は今よりして天神地祇を尊崇しろと云ふか、斯う云ふ事も結構ではあらうが、我輩は左様に萬人一様に「斯くせよ」「斯く思へ」とは云はぬ、爲すべく思ふべき事は萬人萬様で可なりである、要は其人の性格なり境遇なりに順應して其然るべき所に従ふたによいのである。

然らばどうする、左の定義に依つて其人相當の勘考をつけたらよからう。

自己の長所に向つて益々進み、短所を匡正して缺點を補ふ

我々が向上發展の途としては是程肝要な事はあるまい、併し是ればかりでは餘りに漠として居るから、左に之れが實行方法の二三を具體的に示せば

一、自己の最大長所を見出して、其長所に向つて迷はず進

## むべきこと

一、自己の最大長所を見出して、其短所を匡正して自己の完全を圖るべきこと

一、一個の短所を匡正し得ば更に残る中の最大短所を見出して其缺點を補ふこと

此外にも種々の方法はあるであらうが、先づ我々は自己の最大長所と最大短所を見出し、之を利用し、之を補充すると云ふ事が社會に成功し且つ自己を玉にする第一義であらうと思ふ。

我々には長所も一つに限らぬ、その代り短所も澤山にあるものである、併し凡ての長所を一時に全部利用し、多くの短所を同時に匡正しようと思つた所て、さうは行くものではない、先づ以て、その中の最大長所と最大短所の利用と匡正とに努力する事が功を齎らすの捷徑である、

「自分の長所は腕力である」とすれば生意氣に洋服を着て机の上の仕事をすべくお役所の履書記にならうとするよりも、最大長所たる腕の力を大に發揮して、荷車を挽くなり、ロールを廻すなり、船積人夫になるなり、腕力を要する仕事に従事して脇目もふらず熱心に務むるがよい、醫者は醫者、學者は學者、坊主は坊主、それ

れ自己の本分と其長所に向つて全力を傾注すべしである、坊主が法衣を脱いで商賣を始めたり、醫者が匙を投げて代議士になつたりしようとするから間違ひが起るのである、柄にも

無い事をやらうとするものは自己の長所を長所としての強き自覺が無いからである、オレが世を渡るのは腕力である、オレの生命は技術である、オレの仕事は探算の事務に限る、是れ以外の事がして見たいと云ふ浮氣が起つたなら、それは自分を不幸に陥れる魔である、敵である、之れに打勝つのが御大禮の記念であると、迷はず直進する事が肝要である。

さて又自己の短所を匡正するには、先づ澤山の短所を持つとして、その中の最大短所を見出す、例へば

「大酒を飲む人」

であつたならば、自分は是れぞと云ふ缺點も持たぬが只だ酒を飲むと度を守る事が出来なくて、往々にして亂に及ぶのは自己の最大缺點であるを見出したならば盃を手にした時に、

「御大禮の記念」と心に念じて、斷じて度を過ぎぬやうにする

「夫婦喧嘩をする癖のある者」

は、常に小言を言はんとして口を開かんとする利那に「御大禮記念」と心に呼んで、疍癪を押へる、斯う云ふ工合にして自己の最大短所を匡正して行つたならば、其人は遂に完全な人格を築き上げる事が出来るであらう、大禮を記念すべき爲すべき事柄も多いてあらうが、萬人が萬人出来得べき記念事業は、唯此の各自の心理に於て精神的記念を圖るの外は



# 總在一念抄講義

## 序言

▲本講は 大僧正本多日生師 の講述されたるものを速記したるものなり。(二記者)

今日は總在一念抄に就て御話するのであります。此御書を  
見るに就いて、一二注意して置きたいのは此御書は佐渡以前  
の御著作で、聖人三十七歳の御作であります。總て佐渡  
以前に於ては佛教の眞理的研究の側に於ては、天台の教義に  
隨つて御書きになつたのであります。後に至つて純粹の日蓮  
主義を發揮しました場合に於ても、此天台の教義が全然不用  
に屬する譯ではないので、後の發展に對する準備教義とても  
言ひますか——其思想を一轉進すれば、それが即ち日蓮主義  
に入るのである。矛盾するのでなくして、それが道程となつ  
て行くのでありますから、決して差支はないのであります。  
併ながら斯う云ふ天台の教義に拘泥してしまつて、是れ以  
上に進む事が出来ないならば、是が遂に日蓮主義に入る事の  
出來ぬ妨害となる。所が古來日蓮主義の研究者は、天台の學  
說に醉んで、それが爲に進む事が出來なくなつた。それは十

中の九或は全部と言つても宜い位である。そこで維新以前に  
各檀林と稱して、學問する場所はあつたが、其處に於ては、  
全然天台の書物ばかりしか講じないのであるから、それに種  
々の弊害が累なつて、殆ど二百年間出た學者と云ふものは、  
天台に墮落して居るやうな傾向を執つた、其中に多少は良い  
人もあるけれども、大體はさう云ふ傾きである。何故かう云  
ふと日蓮聖人の御遺文は絶対に研究しない、其本も檀林には  
無い位である。寺々にも遺文と云ふものは殆ど無いやうな光  
景を呈して居つたのである、又先輩の書物が多くさう云ふ傾  
きを執るが爲めに、維新以後の學風と言つても、未だ此天台  
的の學說を脱却する事が出来ない。それ故に私が遺文を講じ  
始めてから今日まで其方面は殆ど避けて、總べて講題に上せ  
なかつた。是まで先づ大體に於て、開目抄とか、立正觀抄と  
か色々有益な御書を講じたのでありまして、日蓮主義の純粹  
の思想は、既に私としては講じ終つたから、今度は逆戻りし  
て、基礎的教義を講じやうと思ふ。故に此御書の如きは、先

づ大體が天台の學說で、それを少しばかり日蓮主義に變形し  
つゝある光景を呈するのであります。其處の所を見別ける事  
が出來れば、先づ此御書を講ずる主意が成立するのである、そ  
れは又本文に入つて御話する積りであります。

大體に就て尙ほ一言して置きたいのは、此宗教の本義は哲  
學と違ふ。即ち吾々の理性上の満足だけを以て終るものぢや  
ない。哲學であれば、吾々の智力が満足して、先づさう云ふ  
ものかと云ふ事になれば、それが即ち結論であるけれども、  
宗教は智力が満足する以上に、尙ほ意思の満足——其眞理を  
我がものにしやうと云ふ心を起します。「さう云ふものか」と  
言ふて、彼方に置いて唯眺めて満足するに非ずして、所謂そ  
れを覺らんとする我ものにしやうと云ふ希望を有つ。即ち哲  
學に於て實在と云ふ事を論證すれば、宗教は其實在だと云ふ  
事を聞いた丈で満足しないで、其實在に達せんとするもので  
ある。即ち——吾々が向上せんとする所の大神を満足せん  
とするものが宗教である。哲學と云ふものは消極的に「さう  
云ふものか」と云つて、遠い所で眞理を眺めて、それで終  
る。宗教は今言ふが如く、意思を満足せしめんとするもので  
あるから、其眞理に進む所の手段に入つて來る。其場合には  
佛の方から言へば、如何にして眞理を應用して、迷へる者を  
救ひ得るかと云ふ事が非常な大事なことになつて來る。即ち

衆生濟度の實際の方法である。又迷へる者の方から言へば  
如何にして我が意思を満足し、それに達し得るかと云ふ、實  
行の方法に入つて行く、其場合に、哲學的に研究した眞理は  
その前提となる。眞理の方が高いものではない、理論的研  
究と云ふものは、未だ低いものである。宗教ではそれは道程  
である。此眞理を如何にして吾々は我が物とし得るかと云ふ  
問題になつて、初めて宗教である。それ故に佛教が非常に廣  
い範圍に於て哲學風な眞理を論明しても、それが決して最後  
の結論ぢやない。先づさう云ふ眞理を究めて置いて、其眞理  
の許す所に於いて、實際の濟度を遂げやう——救はんとする  
目的に入つて行くものである。是は殆ど一切經を貫いて居る  
思想であつて、例へば小乘經に於て、眞理的に宇宙を説明す  
ると云ふやうな場合には、消極的に、所謂宇宙的に諸法無我  
である。或は諸行無常であると云ふ風に論じて、何物も此宇  
宙には存在して居るものがないと結論して來る。それが眞理  
であるならば、一切をそこに滅亡してしまはなければならぬや  
うであるけれども、決して宇宙は滅亡して居らない。さう云  
ふ事を前提として八正道を踏んで向上する努力と云ふものが  
非常に強く教へられて居る。それが哲學と違ふのである。若  
し哲學風に、小乘の諸法無我論のやうな思想が十分及んだな  
らば、モウそれつきりて行止つてしまつて、何も活動と云ふ

ものは起りさうもないものであるが、中々さうでない。小乗は矢張り大活動を起して居るのであります。又華嚴經にしても、非常に高い超越的の真理を含んで居る。然らば其真理だけて宜いかと云ふと、中々さうぢやない。華嚴に於ては、實際の宗教の上に就て、様々なる説明を試みて居る。殊に宗教の極致である所の信仰と云ふものを、最もよく説明して居るのであります。今や華嚴宗と云ふものは、唯哲學風の思想に流れてしまつたから、宗教としては殆ど滅びて居る、今日本には十九ヶ寺ほどあるさうである。一時は宗旨の名前も滅びて居つたのを、明治十九年かに再興して、僅かの寺がある、けれども殆ど宗教の作用を爲して居らない、少しも信仰的の感化と云ふものがない。華嚴の學問は今も尙ほ残つて居るけれども、それは華嚴經を誤まつて居るのである。いま華嚴經を繙いて見たならば、立派な宗教の經典である、決して哲學の論書ぢやない。けれども華嚴宗は殆ど理論化して學問となつて、宗教の風味と云ふものが滅びて居る。併し其傾向は華嚴宗には限らない、佛教の多くにさう云ふ傾きが起つて來たのである。例へば般若經と云ふものはどう云ふものかと云ふと。一般人が考へて居る般若經と云ふものは、十八空と云ふやうな事を言ふて、宇宙はまるで空寂なものであると言ふ所は、非常に消極的に見えるけれども、般若經の經典自身は、

中々それに満足して居らない。然らば何故空を説いて居るかと云ふと、先づ簡單に言へば、小さな事に捉はれる思想を排斥して大信に就く、さうして六波羅密の行を積まして、大活動に導いて行くと云ふやうな都合で、般若經自身は矢張り立派な宗教の經典である。所が多く世の宗教家は、般若思想を冷やかな哲學的の意味にして世に傳へる、斯う云ふ風になつて、般若宗である所の三論宗と云ふ宗旨は、日本では滅びて居る。三論宗と云ふものは奈身にあつたけれども、今はない、三論の學問は少しばかりやる人もある。今でもしやうと思へば本はあるけれども、宗教としては既に絶滅されてしまつて居る。是等の華嚴宗、三論宗の如きは學問化して、宗教の風味は滅びたけれども、それ等がやつて居る經典の華嚴經なり般若經なりは、今尙ほ温き宗教の光を有つて居るものである。其例を以て推すと云ふと、眞言宗に於ても、純粹の眞言は學問風の理屈になつて居る。今信仰的のものが附いて居るのは、不動様であるとか、大師に對する信仰、是は俗信であつて、學問の上には關係のない迷信であるから、それは眞言の信仰と云ふ譯ぢやない。眞言の金剛界、胎藏界に對する昔からの信仰と云ふものは學問化してしまつて、理屈は言ふけれども、堅き信仰を有つて居る者は殆ど無いと云ふのは、矢張り眞理の研究の方が高い、宗教の温か味の方が低いと云ふ

間違つた考から起る事である。天台はどうかと云ふと、矢張りさうである。天台は中々學問としては立派なもので、今尙ほ佛教の學問をしようと云へば、天台に入らざるを得ないのであるけれども、併し天台の宗教はどうなつて居るか。天台宗は今あるけれども、彼等の信仰は何處で繋いで居るかと云へば何にもない。觀音の信仰とか、或は様々な散漫なる事をやつて居るので、天台の宗教的信仰と云ふものはない。學問化して、矢張り殆ど亡びて居ると言つて宜い。唯寺だけが残つて居る、さうして學問する坊さんが多少居る。けれども信仰を鼓吹する上に於ては支離滅裂で、何が中心であるかわからぬ本尊も立てなければ、信仰もあら、こちら勝手にやつて居ると云ふ譯である。淺草の觀音は天台宗であるけれども、觀音に對する信仰が宗教かと言へばさうでない。上野も天台宗であるけれども、上野には信仰は見られない、斯う云ふ都合になつて來たと云ふ事は、法華經なり大日經なりは皆な宗教的の經典であつて、それを繙いて見れば、非常に温かき信仰を供給するのであるが、其學風は殆ど哲學風の理論の學風を勃興して温か味を失ふやうになつた。是は殆ど何れも同じ傾きを執つて居る。日蓮宗はどうかと云ふと、日蓮宗は純粹宗教的の宗教であつて、日蓮聖人御自身の活動と言ひ、主張と言ひ、非常な温き、熱誠なる信仰を以て出たものであるけれど

ども長き歴史を傳ふて居る間に矢張り學問化して、曩に言ふ維新以前の各檀林の學風と云ふものは冷やかな學問、殊に煩瑣な學説で、七面倒な事をゴテ／＼言ふのであつて、燃立つ宗教的の激濁たる信仰と云ふものはない。其信仰と云ふものは、人々の精神を濟度して其濟度した方に依つて人生の光を現はし、國家の上にも光明を發すると云ふやうな、活き／＼した力を與へるものでなくして、唯専門の學者がゴテ／＼理屈を言ふて居るので、それが何の事だか、それを言ひ居る者さへ分らぬやうになつた。是は佛教に伴ふ大弊害である。それが何處から來たかと云ふと、今言ふ通り經典自身はさう云ふものではなくして、阿含經を讀んでも、華嚴經を讀んでも皆立派な宗教の經典であるけれども、後世佛教を學ぶ者が學者の議論に負けないやうにと云ふやうな考から、理屈の方へ這入つて行つて、論戰の結果敵に對して、學説を戰はし、唯だ理論の多義を争ふやうになつたのである。若しも此の争が、宗教の力——感化の強弱と云ふものを争つて、お前の方では、さう云ふことを言ふけれども、實際人生を感化し、濟度して行く活きた方の優劣はどうだと云ふことを、最とも盛んに論じて來たならば、佛教は餘程立派な發達を遂げたのであらうと思ふ、過去にも無論高僧碩徳多くの偉人が出て其時代々々を救濟せられたので、其人には熱烈なる信仰もあつ

たけれども、大體が今日に來つて居る佛教と云ふものはどうかと云ふと、冷かな煩瑣の學說を辿る側と、それから教義から遠ざかつた迷信、俗信の方へ流れて行つたものと、此二つの系統に陥つて居る、是れが今日の佛教の振はざる所以である。そこで日蓮主義を研究するに就ても、さう云ふ煩瑣な學問に没頭して行つてしまふと云ふ事は無論可けない、又根據もなき迷信に流れる事は可かぬから、吾々が研究する大方針と云ふものは、理論も研究するけれども、決して佛教哲學として、見るのでもなければ、又冷やかな學說を戦はずのでもなくして、其中から矢張り温かき宗教の力を得て來やうと云ふ事を基礎として研究せねばならぬ、けれども、時には冷かな理論の方へも入つて見ないと、矢張り根據がなくなるから、そこで理論へ這入るのであるが、決して理論の方へ没頭して捉はれるのでないと云ふ事は、何時も深い注意を拂つて置かなければならぬと思ふ、それで此御書の如きは、冷やかな理論の方に屬するのであります、から斯う云ふ御書を講ずるに就ては、今言ふやうな事を餘程深く注意をして、さうして矢張り此中から信仰に向つて行く方面と、真理との連絡の關係を逸しないやうに見出すと云ふ事を、第一の目的に行きたいと思ふ。それから曩に言ふて置いた通り、是は日蓮聖人が充分に自分の學說を發揮するのでなくして、天台の學

間に随つて少しばかり自分の思想の變化を示して居るのである、天台の學問から來て居る思想であると云ふ事を忘れぬやうにして戴きたい。

### 雜誌「統一」の刷新に就て

山根青村

五種の妙行は聖門の通規にして、文書傳道は則ち時代的書寫行なり、受持の正行にして他の四の助行たるは論なきも、而もその正行を助成する助行にして周足せざらんか、可惜益物利生の上に於て、その速度遅々たるものあらん。宗門中古經典讀誦の助行に専らにして、骨目たる信念行を等閑にす、盛衰に氣のぬけたるビールを響せるが如し、客足の遠ざかりしは理の當然、是れ明かに不專讀誦の金文に乖背せし逆路にして、玄妙什師をして受持分絶を叫ばしめては、如何計りうたてき事極みなりしぞ、されど今や宗門のなべてが、此弊風より擺脫して、受持の大切なること識者の何人もが争いなき所、轉眸助行の差配に留意すべきのみ。横に一時の聲益を施す解説もさる事ながら、堅に永久滅びざる文字の傳道をなす、一段効力の多きものあり、況んや巧妙無礙の梵音、之を堪能の筆記により永久に傳ふるに於て、

更に幾曹の勝益なくんばあらず、文明的書寫行の効實に偉大ならずや。

雜誌「統一」は此意味に於ける不斷の活動機なり、而も道遠く任重し、時に多少の情氣ありしは免れざるの數也、今や秋高き氣清く、さらでだに志士夢頻りに驚き、起て窓戸を開いて三更の月明に感無量の時、況んや聖天子御一代の大典を行はせらるゝの盛運に際會す、安國論師の末徒たるもの豈蹴起せずして可ならんや、吾曹同人たるもの、宜しく一段緊約、猛然として内宗門統合の實を擧げ、外思想界の革正に活躍して、法國冥合四海歸妙の大理想を實現すべきなり、雜誌統一の刷新に允り、所感を録して忍水兄の座右に呈すること爾り。

鳳凰おがみ涙せく老婆見し夜明け  
茶人一人僧に交つて雨の夜を語る  
南無妙法題目石や葛かつら  
黄菊見る兒の行きて跡に一葉落つ  
奉祝歌うたいつゝ乙女足ぶみぬ  
さ上げます白黒のみきの道哉  
白菊の垣さまん、に色どりぬ  
先生は生徒の心にて紅葉見し  
ふくからに殘秋のなごり母戀し  
富士のかしら白雲に老の思はれて

吐 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
月 尊 子

### 謹奉祝大正即位御大典

俳句

大典を祝ふ白菊黃喜久かな  
天香や喜久馴染なる日哉  
大葉や野山も錦しきつめて  
頼母しき奉祝振りや菊の里  
初其や萬歳遊の禮添へて  
仰ぎ見る奉祝塔や秋の空  
山霧をみる、大禮唱歌かな  
朝霧や金色光かる標べ山  
大典の記念目立や冬木立  
町遠き遙拜式や征蹄す  
橋や左近も共に時めきて  
大典の旗行列や秋晴れる  
正直の霜なりけり御盃  
祝くや菊と旗とを背の稚兒  
あり樂し樂る菊の御大禮  
萬歳旗左右にひらく菊の花  
菊の香やならば幾代の末迄も  
外國の人にも薫れやまと菊  
菊酒の御盃に香る夫婦かな  
八東穂の波にも光る稜威哉

### 來る一月本誌上に掲載すべく和歌を募集す

宮内省御歌所發聲

松

△必ず別紙、又は葉書に、他用件と別にすべし  
△文字は正しく、切十二月十日  
△清岡子爵は本姓菅原、本邦唯一有職故大實家にして又和歌に長ぜらる。今回本團の爲に其選者たることを承諾さる、讀者續々御投稿あれ  
△尙秀逸には選者の短冊一葉を呈すべし。  
投稿所 東京市淺草區北清島町 統一閣 和歌係

### 統一團中央會

#### 合と決議

宗教統一の遠大なる理想を宣言して立ちたる統一團も既に二十餘年の昔となり、後其聲の反響するところ日宗各派の奮起を促し日運的氣風の發揚となり、近くは或る一部面に於ける日宗各派の提携となり、統合問題となり、着々として其理想は實現せんとするに際して、各派内に於ける一部には或は迷信を食物とする者、統合者の華名旺んなるを妬む者或は統合事業に野心なきやと疑心暗鬼を生ずるの一輩、或は之れに參加し得ざる徒輩等、種々なる手段を以て是れを妨げんと欲し或は流言し或は誹謗し到底座視するに忍びざるものあるを以て、統一團の志士は過日統一團、并に南品川等に會

合し、決議するところあり、今後積極的方針を以て總てを排除し、同志結束して相助勢し、四箇格言當時本願寺と取ひたる當年の意氣を以て、勇往邁進するに決し、團の本多師に對する迫害の如き今や人身私行の攻撃も過ぎ、寧ろ正行に對する時勢に應じたる新らしき一種の手段に出たる法難なるを以て此際同師に無縁の者すら却つて同情する程なれば同志が是れを傍觀すべきにあらざるとし、本誌の如きも近く保證金を納付し各面に向つて正々堂々と論議するに評定されたり

#### 妙滿寺の大法會と法華經獻納

寶祚萬歲四海靜謐の勸願所の由緒を有する、願本法華宗本山妙滿寺に於ては十一月二日三日の兩日をして、近末寺院の僧員を登山せしめ、管長本多大僧正の大導師にて嚴肅なる法要を勤修せられたり、尙同寺の寶物たる法華經は、世に妙滿寺版として、珍重せられたる逸品なるが今回曠古の御大典に遭遇したる好機を記念として淨廟の上、御皇室へ獻納して、寶祚の萬歲を祝願することになり、

#### 願本關東奉祝大法會

願本法華宗關東寺院の奉祝大法會は、十二月一日品

川町妙國寺に於て、天童音樂大法要を嚴修することになり尙十二月二日は淺草統一團に於て、法國冥合の光輝ある日蓮主義の、大講演會を開催し以て皇恩報謝の誠意を顯彰することに確定したれば、同信の士女は法座に列せられんことを庶幾す、

#### 京都通信

▲十月一日本山に於て國禱會を行ふ  
清水一乘師前座説教終て  
定業亦能釋  
▲同月八日大慈院に於て婦人會  
▲同月十日川東本正寺會式に際し  
恩山德海  
▲同月十二日正行院婦人會に於て  
披苦樂  
▲同月十二日本山御會式に際し京藤義應師の説教終て  
本山部長藤原啓門師の説教ありて大に法益を施せり  
▲同月十三日正行院會式にて藤原啓門師の説教あり  
▲同月十四日三條衣桐西村氏宅にて藤原師の家庭講話あり  
▲同月十五日千木五辻上ルる壽景寺の講演にて  
交愛念子と言ふ題のもとに於て金光孝碩師の講演あり前座略す  
▲同月十七日成就院にて宗祖の御一代に就て住職清水一乘師の講話あり  
▲同月十七日法光院に於て  
如來具宿  
▲同月十七日本山に於て天晴會主催のもとに於て盛なる講演ありたり  
金光 孝碩  
銀井 乾升  
金光 孝碩

幹事 西村喜一郎

日本國と日蓮聖人 文學士 小林 一郎  
▲十月十八日本山方丈に於て護正會の主催にて管長親下の講演を請したりしが未曾有の盛大なりき即ち開會之辭  
金光 孝碩  
佛敎信仰の體系 本多 日生

#### 京都第二報

▲十一月一日京都本山妙泉寺に於て  
一、佛敎の意義 久世 寬照  
一、本佛出世本懷 石井 寬俊  
▲十月二日  
一、宗祖上人の信仰 久世 寬照  
一、觀祖の社會觀 石井 寬俊  
▲十月三日  
一、信仰の一義 久世 寬照  
一、日蓮主義の其一 石井 寬俊  
▲十月八日池田治兵衛宅に於て家庭法話  
一、信仰的生活 石井 寬俊  
▲十月九日北村末次郎宅公會布教  
一、日蓮上人の孝道 久世 寬照  
一、十界互具論 石井 寬俊  
▲十月十六日寂光寺に於て宗祖御會式修行説教  
一、宗祖上人の活動 石井 寬俊  
▲十月十七日午後六時二條降谷明晴宅家庭法話  
一、日蓮上人の人生觀 石井 寬俊  
▲十月廿三日午後戸田榮助宅家庭法話  
一、天晴地明 石井 寬俊

#### 明石教報

各地教報

▲十月二日圓乘寺に橘香會の例會を催す  
修養と信仰 服部 重吉  
道徳と宗教との關係 川崎 英照  
▲同十日夜郡公會堂俱樂部に於て  
法華經講義 川崎 英照  
▲同十二日夜圓乘寺に婦人會を催す  
心こそ大切なれ 川崎 英照  
▲同十八日同寺に清話會を開く  
▲同二十日午後一時より明石警察署に於て六十名の警察署官吏の爲め精神講話會を開き爾今毎月三回づゝ開催すと  
人格完成 川崎 英照  
▲同二十日夜公會堂俱樂部に於て  
法華經講義 川崎 英照  
▲同二十四日藥師鈔藏氏宅に於て  
御遺文講義 川崎 英照  
▲同三十日午前十年より明石警察署に於て精神講話  
人格完成 其二 川崎 英照  
▲十一月一日和氣小學校にて青年團  
德光一心 原田 日男  
▲同二日三周村小學校青年團總會  
開會之辭 國友 團長  
青年の修養 原田 日男  
▲十二日小林松太郎宅  
正しき信念 原田 日男  
▲十五日木成寺婦人會

#### 和氣教報

岡山縣和氣町に於ける報告左の如し  
▲十一月一日和氣小學校にて青年團  
德光一心 原田 日男  
▲同二日三周村小學校青年團總會  
開會之辭 國友 團長  
青年の修養 原田 日男  
▲十二日小林松太郎宅  
正しき信念 原田 日男  
▲十五日木成寺婦人會

#### 千葉縣教報

▲十月十二日夜新治村大澤、大澤寺に於て法命會秋季大會を舉行す、先づ富田林惠開會の趣意を宣し夫より幻燈講演に移り、山田誠心、富田林惠、立代りて説明す、聽數百五十名にて大盛況なり  
▲十月十三日夜新治村上太田成川寅吉宅に幻燈講演會を開催し富田林惠説明をなす  
▲十月十五日夜新治村上太田關屋松太郎宅に幻燈講演會を開催して富田林惠説明講演をなす  
▲十月二十日夜土氣本郷町高津戸本休寺に於て萬御難會を幸に宗祖幻燈講演會を催して山田誠心、富田林惠説明講演をなす  
▲十月二十一日夜豐田村小林大業寺に於て幻燈講演會を開く、宮川光熙、山田誠心、富田林惠代るて説教を爲す  
▲十月二十二日大澤大澤寺に於て萬十ヶ村萬人講供養ありて午前法要、午後開演(説教)  
開會之辭 富田 林惠  
縁の綱に就て 島本 順祐

#### 大阪教報

▲十月十五日午後六時半開會 中寺町蓮成寺に於て大阪天晴會並に大阪願本同信會聯合開催先づ天晴會幹事池田爲三郎開會を宣し、次て  
開會之辭 梶木 日種

日蓮上人涅槃大石像に就て 高見 慈悦  
勢々退く心なかれ 山根 日東  
佛教信仰の體系 本多 日生

▲十月十六日講演會を堂開寺に於て開會す  
開會之辭 京藤 義應  
日蓮上人の人格 山根 日東  
法華經の妙旨 本多 日生  
會衆百名を出て其だ盛會なりし

第七教區教報

▲十月二十日午後一時、山武郡福岡村桂山桂徳寺にて  
宗祖聖人御法難會講演を開く  
靈光 長 美明  
▲同日午後三時半同村九十根善立寺に法難會講演開會  
當著忍辱經 長 美明

長生教報

▲十月十九日千葉縣長生郡二宮本郷村木澤寺に於て青  
年會總會を開き講演を催したり  
一、開會之辭 大和久會長  
一、農事改良に於て 柏谷 技手  
一、青年會の本領 秋葉 日茂

市原教報

▲千葉縣市原郡湯津村、大成安立寺に於て講演會あり  
たり  
一、開會之辭 山下 純秀  
一、信徒之心得 鶴澤 純貞

美作吉ヶ原通信

▲九月一日勝田郡南和氣村長中村孝利氏宅に於て佛事  
を營なまれたるに因り同氏宅に於て講演を開く  
信仰の定軌 増田 智靜  
▲九月二十一日彼岸初日の法要を本郷寺に修法し夜講  
演開會す  
推理的的教心 増田 智靜

▲同彼岸給日本郷寺に於て  
自我偈の由来 増田 智靜  
▲十月十三日吉ヶ原西村淺二郎氏の希望に因り同氏宅  
に講演を開く  
權門徒の玄語 妹尾榮二郎  
受持の三寶 増田 智靜

▲同月二十一日舊九月十三日夜本郷寺に龍の口御法難  
報恩會を嚴修しぬ  
御難會と人開會 増田 智靜  
▲同月二十五日吉ヶ原那子代藏氏の妻けん女の病氣平  
愈祈念の修法をなし終て講演す  
感應の實感 田島 芳藏  
受持の題目 増田 智靜  
右は九十兩月の概況にて久しく法雨に霑ばざりし事な  
れば毎回顧る盛況にてありしと

東都通信

▲十月十五日小石川白山會  
思想上の危機 三上 義徹  
▲十一月一日夜小石川白山會講演

統一通信

▲十月十七日午後一時統一開に於て  
華果 江見 乾丈  
社會改善運動の功力 小西 憲三  
御大典と日蓮主義 山名 日宗  
▲同月二十四日午後一時統一開に於て  
日蓮上人の奮闘 高木 本順  
信仰と權威 水野 乾心  
日の理想と日蓮上人 三上 義徹  
▲同月三十一日午後一時統一開に於て  
妙法の威力 大森 體男  
證明の意義 笹川 日堂  
御大典に對する國民の心得 能仁 事一

品川教報

▲十月八日午後一時木光寺に於て  
如來布教の元旨 笹川 日堂  
▲同月八日午後七時新井宿善慶寺に於て  
思想問題に就て 笹川 日堂  
▲同月九日午後一時清光院に於て  
本佛の御慈悲 今成 日誓  
▲同月十二日午後二時妙國寺に於て  
日蓮上人の信仰 本多 日生  
▲同月十三日午後一時妙蓮寺に於て  
日蓮上人の高風 笹川 日堂

▲同十五日午後一時木榮寺に於て  
法華の大道 笹川 日堂  
▲同月十六日午後七時品川町高木佐太郎方に於て  
體現用語 笹川 日堂

名古屋教報

▲十月十二日靈山寺に於て正午十二時より宗祖御會式  
法要度修後講演  
最高の宗教 關 屋 俊 應  
吾人の本領 矢野 聖 顯  
人情美 有田 安 道  
▲同日午後七時より法華寺に於て御會式修後講演  
道徳と法律 關 屋 俊 應  
日蓮聖人の國家觀 矢野 聖 顯  
毒想を排す 有田 安 道  
▲同月十二日正午より常徳寺に於て御會式修後説教  
武士の妻 矢野 聖 顯  
慈悲爲本 有田 安 道  
▲同夜七時より櫻木教會にて御會式執行後講演  
社會の裏面 矢野 聖 顯  
純 信 仰 國 友 日 城  
▲十四日午後一時より妙行に於て御會式修後講演  
軍馬の功勳と人間の薄情 矢野 聖 顯  
大和民族の發展 有田 安 道

顯本宗學會報

▲顯本宗學會に於ては去る八日午後一時東京日本橋區  
堀越町相互俱樂部に於て御大典奉觀會を開會す、其式

辭は第一祝詞法要、次に慶讃講演、次に萬歳高唱、次  
に奉祝宴會、來會者二百餘名にして午後八時半散會せ  
り演題演者は左の如し。  
一日蓮主義としての祝詞 山名 日宗  
一御大典と日蓮主義 小島 傳次郎  
外數名出演せり

福井通信

福井市外山の内村本行寺に於て十月九日、十二日、廿  
三日講演を催したるもの左の如し。  
人生の根本義 秋葉 純 一  
日蓮上人の耐難に處する態度 同  
本佛と吾人の關係 同

統一音信

▲即位御大禮 行はせらる、國民等々萬  
歳を唱へて 皇室の盛儀を祝し國運の隆  
昌を祈る、歡喜の情乾坤に充ちて、法  
冥合の聖勝國の神氣洋洋々として動くを見  
る。

▲門下の記念 事業としては統合問題の  
解決に過ぎたるはなけれど、外にしては  
文書傳道、講演公開、海外布教、布教所  
新設等夥多なるべく何れも道念の發源に

基くべし。

▲都會葬儀場 は其中央に堂々たる設備  
を見たく、文庫の設立、納骨場の時代に  
添ふべき設備など工夫すべき事多し、何  
れも記念事業として此際其企圖あるもの  
は發表せよ。

▲本誌發行人 三上義徹氏は赴任地の都  
合に依つて辭退、代りて松尾英四郎氏名  
義人となれり、名義は別となるも統一團  
報以來二十年の精神は一貫して變るとこ  
ろなし。

▲新編輯同人 は統一初號より種々の關  
係を有する野口日主、鈴木日雄、山根日  
東、今成日誓、井村日成、中村日錦、笹  
川日堂、關田日城、石塚日郎、石川顯隆  
等の諸氏。

▲本誌の主幹 は本多日生師自ら其局に  
當り、高遠なる思想を開放して言論の權  
威を示さんとす、是れ正に大將馬を陣頭  
に進むるの觀あるべし。  
▲新編輯主任 を一寸紹介します、松尾

英四郎氏は十餘年前二回まで本誌の編輯主任たりし舊縁のもの、有髪の僧として居士忍水として以前は多少其の名を知られたものに候

▲大阪操觚界に鼓城と號して多少の存在を認められ、頃日は舊都寧樂に住し王山と稱して南宗畫に筆を弄したりしが、今回再起して東都の人となりたるなり、専念本誌發展の爲に盡すと云へり。

▲保證金積立をなして日蓮主義、統一主義より眺めたる社會萬般に對する評論を致すことも餘り遠き未來ではありませぬ。

▲本誌の事務は御存じの東京市淺草區北清島町十四番地統一團にて採ります、井村氏は總務、松尾氏と高木本順氏とが庶務を採ります、編輯會議も無論統一團にて開催すべし。

▲代金の受附は統一團内統一團振替口座壹貳壹九番宛に願ひます。從來の三上氏宛の口座は今後は統一團とは何等の關係

係之れ無ければ確く御了知を願ひます。▲編輯の體裁は内容と共に一段氣を附ける筈なりしも松尾君が引越しか何とてかマダ尻が落ちつかないさうです、甚だ勝手ながら漸々見勝れたものにするとの事なれば今一回の御猶豫を……

▲名家の談話を次號からは編輯主任自ら訪問筆記して誌上に紹介するとの事、

○御大典奉祝會(顯本青年布教團)

顯本青年布教團は、昨年十一月七日發會已來毎月統一團に於て、講演會並に親睦會を開催し來りしが、十一月十日御登極當日御大典奉祝會を舉行せり。會場の中央御本尊の兩脇には萬歳旗を立て、講堂の左右には大萬歳旗五色旗など莊嚴したり、午後一時井村前正の導師の下に祝詞法要を嚴修す次に武田幹事の開會の辭に次ぎ吉田幹事の萬歳、小西幹事の教育の功果、井村前正の三種の神器に對しての題下に我御皇室の尊嚴を説かれたるが、約三百餘の來會者は何れも熱を正すを見たり。時正に三時三十分一同起立紫宸殿に向ひ井村前正の發聲にて三度び萬歳を高唱し御登極に對する滿腔の誠意を表し、五分間休憩の後津田旭派の琵琶、神田伯麟の講談、木村重治の浪花節等數番あり何れも勤王の精神を鼓吹せる物語筋なり、五時半樓上に於て團員の奉祝宴を開會し和氣洋々歡喜の裡に散會せり。

○本多管長參賀

本多管長には八日付にて文部省より十日即位式を行はらるるに付六日官報宮内省告示に依り參賀の儀取り計らばせられたしとの電報に接し十日參賀相なりたりとぞ尙十四日二條離宮に於て賜餐に列せらるる筈なり。

○妙滿寺靈寶陳列

京都妙滿寺に於ては今回御大典に付諸方より名士靈寶あるを幸に是を善緣として所藏寶物を十二日午後一時より同四時迄の間客屋に陳列し參觀に供したるが諸名士百三十名來堂あり只管感嘆したりとぞ靈寶目錄左の如し。

陳列靈寶目錄

- ▲書幅之部
  - 一日蓮聖人真筆
  - 一太閤秀吉公筆
  - 一越後謙信書翰
  - 右二品修史局の參考品なり
- 一 大佛鐘之銘
  - 國家安泰問題の鐘銘の原本平安通誌にも出たり
- 一日什正師眞筆奏文狀
  - 足利義滿公に對し庭前に於て諫曉の筆跡なり

(以下數十點は次號)

訓示

宗内一般

今回別紙ノ通り宗教局長ヨリ通牒有之候ニ就テハ各地方ニ於テ青年團體組織ノ際其指導援助ヲ求メラル、ニ於テハ其趣旨ヲ翼賛シ之カ援助ニ努力可有之此段及訓示候也

顯本法華宗宗務廳

(別紙)

發宗七一號

青年團體ニ關シテ今般内務文部兩大臣ヨリ別紙ノ通地方長官ニ對シ訓令相成候處之カ指導方ニ關シテハ地方當局者ニ於テ各地ノ狀況ニ應シ市町村吏員、學校職員、警察官、在郷軍人神職僧侶、其ノ他篤志者中適任者ニ付協力ヲ求メ指導宜シキヲ制セシムヘキ様更ニ兩省次官ヨリ地方長官へ通牒ノ次第モ有之自然貴派所屬教師ニ於テ右申入ニ接セラレタル場合ニハ奮テ其ノ求ニ應シ青年團體ノ本旨ニ鑑ミ盡力相成候様御取計相成度依命此段及通牒候也

大正四年十月十一日

文部省宗教局長 柴田駒三郎

内務省訓令

北海道廳府縣

青年團體ノ設置ハ今ヤ漸ク全國ニ洽ク振否ハ國運ノ伸暢地方ノ開發ニ影響スル所殊ニ大ナルモノアリ此際一層青年團體ノ指導ニ努メ以テ完全ナル發達ヲ遂ケシムルハ内外現時ノ情勢ニ照シ最モ喫緊ノ一要務タルヘキヲ信ス

訓示

抑モ青年團體ハ青年修養ノ機關タリ其ノ本旨トスル所ハ青年ヲシテ健全ナル國民善良ナル公民タルノ素養ヲ得セシムルニ在リ隨テ團體員ヲシテ忠孝ノ本義ヲ體シ品性ノ向上ヲ圖リ體力ヲ増進シ實際生活ニ適切ナル知能ヲ研キ剛健勤勉克ク國家ノ進運ヲ扶持スルノ精神ト素質トヲ養成セシムルハ刻下最モ緊切ノ事ニ屬ス其ノ之ヲシテ事業ニ當リ實務ニ從ヒ以テ練習ヲ積マシムルモノ亦固ヨリ修養ニ資セシムル所以ニ外ナラス若シ夫レ團體ニシテ其嚮ヲ所ヲ誤リ施設其宜シキヲ得サルコトアラムカ當ニ所期ノ成績ヲ擧ケ得サルノミナラス其弊ノ及フ所測リ知ルヘカラサルモノアラム故ニ地方當局者ハ須ク此ニ留意シ地方實際ノ狀況ニ應シ最モ適實ナル指導ヲ與ヘ以テ團體ヲシテ健全ナル發達ヲ遂ケシメンコトヲ期スヘシ

大正四年九月十五日

内務大臣法學博士 一木喜徳郎  
文部大臣法學博士 高田早苗

發宗四六四號

青年團體ニ關シ今般内務文部兩大臣ヨリ訓令ノ次第モ有之候處右團體ノ組織設置區域其他ニ關シテハ大體左記標準ニ依リ指導相成候様致度尤モ此ノ際強テ遠ニ該標準ニ據ラシメムトスル儀ニハ無之候ニ就テハ十分御留意ノ上深ク地方實際ノ情況ニ鑑ミ其宜シキヲ制セシムル様御指導相成度此段及通牒候也

大正四年九月十五日

内務次官 久保田政周  
文部次官 福原鏡二郎

青年團體ノ設置ニ關スル標準

- 一、青年團體ノ組織
  - 青年團體ハ市町村内ニ於ケル義務教育ヲ了ヘタル者若ハ之ト同年齡以上ノ者ヲ以テ組織シ其ノ最高年齡ハ二十年ヲ常例トスルコト
- 二、青年團體ノ設置區域
  - 青年團體ハ市町村ヲ區域トシテ組織ス但シ土地ノ狀況ニ依リ部落又ハ小學校通學區域等ヲ區域トシテ組織シ若ハ支部ヲ置クコトヲ得ルコト
- 三、青年團體ノ指導者援助者
  - 青年團體ノ指導者ニハ小學校長又ハ市町村長其ノ他名望アル者ノ中ニ就キ最モ適當ト認ムルモノヲシテ之ニ當ラシメ市町村吏員學校職員警察官在郷軍人神職僧侶其ノ他篤志者中適當ト認ムル者ヲシテ協力指導ノ在ニ當ラシムルコト
  - 團體員ニシテ團體員タルノ年齡ニ過キタル者ハ團體ノ援助者トシテ其ノ力ヲ竭サシムルコト
- 四、青年團體ノ維持
  - 青年團體ニ要スル經費ハ努メテ團體員ノ勤勞ニ依ル收入ヲ以テ之ヲ支辨スルコト

異動報告

任法務部長  
依願免法務部長

權僧正 井村 日 威  
僧 正 鈴 木 日 雄

正 誤

前報告大學林學生成績表ノ中專門科外典科第一年ノ下左ノ通リ脱落ニ付之ヲ追加ス

專門科内典科第一年  
東洋大學大學部第二科第四年修了  
大正四年十一月十五日

顯本法華宗宗務廳 國分 顯 有

御大典記念施本用

三宅雪嶺先生序  
犬養木堂先生跋  
寂光寺主野口日主述

碁道と法華經

本書は碁道を法華經主義に開顯したるものにて、曾て見ざる新着想に依り、死を活碁と化し、遊戯碁を道教碁と化し、一碁技をして意義あらしめたる珍書なり本因坊は寂光寺の住持なりし關係より後住日主上人此の書を口述されたるを黒照玄筆記したるものなり幸に四方諸君御大典記念又は傳道用施本として廣く配付せられよ

○多數なれば一部一錢の割にて需に應じ可申候  
尙部數に依り御相談可仕候

發行所 金澤市蛤坂町四十二番地  
本 長 寺

如何に刷新すべきかの十二月號を見よ!!

來るべき刷新號の「統一」

- 一、今回は紙數減少、體裁調はず甚だ汗顔の至りですが、來月號からは面目を改めます。
- 一、十二月若くは一月號から保證金を納めまして社會的事件に對しても日蓮主義、統一理想より論評する積りです。
- 一、代金値上げは甚だ心苦しく存じますが、刷新するに就ては止を得ないので、懇からず御承知を祈ります。
- 一、代金は以後必ず、東京市淺草區北清島町統一團、東京口座二二一九番にお依頼します。
- 一、寄稿は其月の二十五日迄、以後の分は當方の都合にては次號に廻しますから御承知下さい。
- 一、交換雜誌は統一團へ。
- 一、松尾鼓城宛の書信は當分統一團へ。
- 一、從來販賣の書籍は統一團内松尾鼓城宛にて申込下さい。

一月用施本册子

廣 告

日本國と蓮祖

右は一冊一錢乃至一錢五厘の見積りにて小册子として印刷可致豫め部數御注文下され度候

統一閣布教部

日蓮主義統一思想を知らんと欲せば本誌に!

# 統

◀ 號十五百二第 ▶

◀ 號月二十第 ▶

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地

電話番號 下谷六三一〇番

代金拂込は口座東京一八九一(統一團)

明治三十一年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正四年十二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

統 (號月一十第)

第一 號九十四百二第 (行發日五十月每)行發日五十月一十年四正大 可認物便郵種三第日四十二月二年十三治明

## 謹んで讀者諸賢に告ぐ

不肖儀明治四十三年秋以來、『統一』編輯の任を負ひ聊か文書宣教の聖業に従事致居候處、今回宗門の命に依り地方教界に於て微力を盡すべき事に相成、不日東京の地を出發可致候に就ては、『統一』に關する一切の責任は新發行者に引継ぎ仕り候、茲に多年信行上の交誼を辱ふしたる讀者諸賢に對して謹んで敬意を表し候

- 一、從來の購讀料未拂分は統一團 (振替東京壹貳 壹九番)宛御拂込方相願候
  - 一、既に購讀料拂込せられ候分は帳簿に記入し其儘新發行者に引継ぎ責任を負擔可致此儀御承知相願候
  - 一、從來販賣致居候各種の書籍は今後不肖宛御用命有之候共御便宜相計り兼候へば必ず新發行人宛御申込相成候様御願候
  - 一、不肖の居住地は退て報ずるの機會可有之候
- 大正四年十一月十五日
- 「統一」元發行編輯者 三上義徹 恐々

## 御挨拶

拙者儀十數年前本誌『統一』を編輯致して居りました緣因がありますが、今回又三回目の編輯の任務を帯ぶることになりました、菲才無學到底其任ではありませぬが、同信諸先輩の引立と團員讀者諸君の愛顧に依つて、どうか紙面を整備し過失なからんことを祈つてをさます。但し今回は引継早々の際知らぬところの多いのは平に御海容下さい。

忍水 松尾 鼓城

## 團員讀者諸君

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統一團 △發行兼編輯人 松尾英四郎 △印刷人 鈴木日雄